

nanako-fifteen

II

第二章

あんたなんか、だいつ嫌い！

a.minemura



nanako-fifteen II

登場人物

2・あんたなんか、だいつ嫌い！

031.

032.

033.

034.

035.

036.

037.

038.

039.

040.

奥付

登場人物

間宮 ひろ	高校二年生 陸上部で活動中のスポーツ少女
桧山 健	大学生 ひろと同じマンションの住人
新城 富夢（とむ）	(株)新城不動産の社長でマンションのオーナー
新城 なおみ	新城不動産の専務 社長夫人
権田 トオル	高校生 柔道部と華道部の両方に籍を置いている
河合 ヤスオ	高校生 陸上部のマネージャー
河合マスター	ヤスオの父 お好み焼き屋「かわい亭」店主
間宮宮司	ひろの父 神社の宮司
ななこ	記憶喪失の幽霊

2・あんなんか、だいつ嫌い！

031.

かすみ草のむこうで微笑み、「ありがと」と言うななこは、惚れ惚れするほどかわいらしかった。まるで花畑の中の妖精だ。こんな微笑を向けられたら、誰だってめろめろになっちゃうわよねー、とひろは考える。あのぶつきらぼうだって、と考えかけて、ひろはあわてて手をばたばたとふって、楡山のイメージを振り払った。

「ところで、ななこさん、なにか思い出した？」

昨日の今日でそんなに進展があるわけないと思いつつ、聞いてみた。ななこは「ううん」とかぶりを振った。そして「ごめんね」とすまなさそうにつぶやいた。

「あやまることなんてないわよ。いつまでもここにいてくれていいわよ」

あとの方はとってつけたような言い方になったが、笑顔で取り繕った。そんなひろをみてななこは真顔で言った。

「そうはいかないわ。わたしはここにいちやいけないのよ、それはわかってるの、早く用事すませて行かなくちゃならないの」

「そんな、思いつめないでよ……」

「ごめんね」とななこはもう一度言った。「あたし……ひやまさんに、会いに来たみたいなの」

「会いに、来た、？」

「なにか、用事があったんだわ、会わなくちゃならない理由が」

「……どんな？」

「それは――」

「うん？」

「――会ったことがなかったから――」

ひろに微妙な表情をされて、ななこはうつむいた。「へんなこと、言ってるわよね、あたし。そうよ、へんなのよ」

ななこはにわかに取り乱し、声を詰まらせた。かわいらしい手を握り締め、開き、顔を覆ってすすり泣いた。

ふるふると震えているほっそりした肩に手をおいて少しでもなぐさめようとしながら、ひろも困惑した。

興奮した友人に泣かれたことはあるが、彼氏に誤解されたとか親の物分りがわるいとか友達にかした大事なCDを失くされたとか担任がバカだとか、たいていはひろの理解の範疇にあることで、なぐさめの言葉にはそう困らなかった。だが、記憶を失くしているゆうれいをどうなぐさめたらいいのだろう。

だいたい肩に手をおこうにも手はななこを素通りしてテーブルに落ち、勢いあまってバランスを崩した上半身でかすみ草を活けた花びんを倒し、ひろ自身がその上に倒れた。ななこはびっくりした顔で床にころがったひろを見ていた。

「——だいじょうぶ？」

だいじょうぶ、といいながらひろは不自然な姿勢で倒れた床からじたばたとおきあがった。ななこのためにかざったかすみ草はめちゃくちゃになっていた。

「あーあ」とひろは頭をかいた。

「ふんだりけったりね」口にはだせなかったが、かすみ草はひろの財布にかなりひびいていた。

「ごめんね。わたしのせいね——」

しゅんとなってしまったななこに向かってひろは明るい声で言った。

「やめようよ、そういうの。ね？」

「——ええ」

ひろは床を拭くものをさがしながら言った。

「あなたの気がすむまでここにいてくれていいんだから。ていうか、ここにいるしかないじゃない？」

「——ええ」

ひろはこぼれた水をふき取り、散らばったかすみ草をかき集めた。

花びんは割れなかったし、花の三分の一くらいはつぶれずにすんだ。「よかった！」とひろは明るく声をあげ、ななこもふわっと気分がうきあがるのを覚えた。

「きつと、なにかわけがあるのよ。あーそういうことだったんだーって、すんなり納得できるわけが。そのうち思い出せるって！ 時間がかかったっていいじゃない。ううん、時間かけなくちゃと思うのよね、だってあなたの一生のことよ」

ななこはふしぎな目のいろでひろを見ていた。

「これもなにかの縁よ。私がとことんつきあっちゃう。いざとなったらうちのおとうさんに応援頼むから」

「あなたのおとうさん？ こわくない？」

「へいきへいき。こわくなんかない！ それどころかすっごく頼りになるわ！」どんと胸をたたいてみせ、「だから安心して」というひろの一言は、ななこをしっかりとつかんだ。

033.

日中、ゆうれいのななこがどこで何をしているのかひろにはわからなかった。

夜になどどこからともなく現れ、初夏の早い日の出の前には姿を消していた。ひろに「安心して！」と言われてからはなにか吹っ切れたように、ななこは口数が多くなった。

彼女は思い出せることはすべてひろに話そうと決心したようだった。

強く記憶に留まっている事とそうでない事がはっきりしていて、ななこの語る彼女の身の上は、ひろが自分自身で経験した事実のようにひろの中に刻まれた。

ななこが強く記憶していることの多くは桧山に関する事で、夏休み明けの本屋での出会いから数ヶ月の間に彼とのあいだに交わされたつつましい会話を、ななこは詳細に再現してみせ、澄んだかわいらしい声でもってひろの魂に刻み付けていった。

それは不思議な体験で、時にひろはななこの日常や学園生活を追体験しているような錯覚に襲われた。

いつのまにかひろは、ななこの十五年の人生と彼女の魂をともに生きているひろ自身をみた。

十七歳の、少年のような桧山がきつい目をまぶしそうに細め、言葉を選び選び、おそるおそる話しかけてくるのを見た。

季節の変わり目の冷たい雨の降るモトーンの町並と、傘とウィンドブレーカーで宝物のように護られている少女を見た。

透明な空気の秋、公園の木陰でみせる横顔のかげりと弾けるように笑い転げる彼の表情の変化を見守る時、ななこが感じたときめきはひろのものでもあった。

初恋と呼ぶには、それはあまりにも——おとぎ話のようにのどかで嵐の目の中のように平和な——やすらかな感情だった。

こんなの、ありえないわよ、とひろは思った。

ひろがクラスメートや部活仲間から打ち明けられ、漏れ聞く高校生の恋模様はもっと、ずっと、えげつないと言っていいほど生々しくてあからさまなものだった。

こんなの信じられない、とひろは思った。

三年前といえば、ひろが中学生のころのことだ。当時でさえ、同級生の初体験談を耳にする機会があった。

これ、いったいいつの時代の話なのよ、とひろは思った。

ふたりのあいだに流れていた穏やかな時間はそれはそれでうらやましい、と思う。

だがななこの話をよくよく聞いてみれば、ただ共有した時間があるだけ、桧山とななこのあいだにあるのは、ただそれだけ、なのだ。

それだけ？ とひろは問い返したかった。

その思い出だけで、桧山さんはあんなに嘆きかなしんでいたというの？

そんなの、ばかばかしくない？

桧山さんもななこも、どっかずれてるわ！ ヘンよ！ ふたりとも！！

034.

「あ～、どうしよう～」

来週半ばから始まる期末テストの準備をまるでほったらかしてあったひろだ。

いいお天気の日曜日の朝、ばたばたとノートをひっくり返していると、電話が鳴った。なおみ専務だった。

「わるいんだけど、ひろちゃん、ちょっと事務所のお留守番頼まれてくれない？」

不動産会社は休みだったが、管理人事務所は無休だ。今日は業者が来る予定があるので留守番をしていてくれというのだった。こういう時に限ってアルバイト桧山はいないらしい。

「使えないヤツ！」

口のなかでののしり、じゃあ事務所の留守番しながら勉強しようとかき集めたノートを抱えて、ひろは一階の管理人事務所に向かった。

「きょうは、おじさんは？」

「接待ゴルフよ、社長も楽しじゃないわ。十一時に空調のメンテナンス屋さんが来ることになってるの。それまでにはおばさん、戻るから、ね」

なおみはふだんはひとつにまとめている髪をとくと、十歳は若返る。コンパクトなニットにロングスカートなどまとい、日傘を手にした日には見間違えるほどだ。

富夢(とむ)おじさんにはもったいないわと思いつつながら窓から見送っていると、桧山がそこから戻ってきて、なおみに見とれ、エントランスのちょっとした段差につまづいていた。

「——ばっかみたい」

035.

事務所にひろがいるのを見て、桧山はうっという顔をし、しづしづと入ってきた。

(そんなにあからさまにやな顔することないじゃない！ 傷つくなあ！) 思いながら、ひろはぜんぜんちがうことを口にする。「朝帰りですか？」

桧山はひろを見ずに淡々と言った。わざと感情を押しさえているような口ぶりだった。

「——タベ弟が来て泊まってっただ。今朝の電車で帰るっていうから、駅まで送ってきた」

「弟さん？」

桧山は答えずに軽くため息をついた。目をあげたがひろをみているわけではなかった。

「お疲れみたいね」

「——ああ。ちょっと疲れた。——実家でいろいろあって、さ」

「——お茶、淹れましょうか？ なにがいいですか？」

「ありがとう、任せる」

桧山は本当に疲れているようだった。

「一番上の兄の、奥さんが——」と彼は自分から話し出した。「車で事故った」

「——え」

「相手は小さい子供で、見通しのわるい路地で飛びだしてきたらしい。義姉の車を見てびっくりして自分で転んだんだそうだ。姉は急停車してぜんぜん接触してないんだが」

「——それで？」

桧山は疲れたようにイスの背もたれに体を預けた。

「子供の母親が、さ、そばにいたんだがよそ見してたもんだから、自分の目でみてないんだな。車にはねられたとって大騒ぎになってしまっ」

「はあ」

「救急車と警察呼んで——野次馬にかこまれて——子供の母親に人前でなじられて——ショックで流産しちゃった。転んだ子供は膝をすりむいただけ」

「——そんな」

「親父もおふくろももうがっくりさ。初孫で、それは楽しみにしてたんだ。——誤解ってほんと、暴力だよな」

ひろはデスクの上にそっと緑茶をおいた。

「なんて言っているのかしら——お気の毒です」

楢山は目を閉じて両手で鼻先を覆った。

（——きれいな手——）

「兄に電話しなきゃ。親父とおふくろにも。でも、なんて慰めていいのかな……」

楢山は途方にくれ、沈んでいた。

「楢山さん、お休みとお兄さんとお義姉さんと、ご両親に会いに行ってきたらどうですか？」

とたんに目が合ってひろはどぎまぎして緑茶を載せてきたお盆を抱きしめた。

（へ、へんなこと言っちゃったのかな？）

「——ああ、そうしょうか」

「ええ！ 気持ちを伝えたいなら行動であらわすのが一番だわ！」

「そう、だな。専務が帰ってきたら話してみるよ。おまえはテスト勉強？ みてやろうか？」

楢山のいう彼の両親と兄弟たちが本当の家族ではないことを、その夜、ななこが教えてくれた。

「彼は本当に繊細で優しいひとよ。ちょっと不器用なところがあるけど」

ななこはやわらかな表情で言った。

「ものごころつかつかない子どもの時に、実の両親を失くして、他人に囲まれて大きくなった。本当の家族を持ったことがないの。あなたや私のように生みの親に育てられた人間には当たり前すぎるけど、無条件に甘えたり甘えられたりできる、ごく普通の家族ね。彼にはそれがなかった。

どういふものか知らないから、とても怖いものでもあり、強くあこがれるものでもある。彼にとって家族ってそういうものなのよ」

少し間を置いて、ななこは続けた。

「でも、ものごころつかない頃の彼は、とても大事にされて、愛されていたんだと思うの。彼は繊細だけど脆くはない。ぶっきらぼうに見えても他人に優しい。愛されて育った証拠だわ」

ひろは、いわれてみれば……と考えた。

(もろそうに見えるけどじつは傲慢、人当たりはいいけど肝心な時に冷たい、そういう、見た目と中身がなんか違うなって人、たしかにいるよね……)

036.

そういえば楡山は日本人じゃなかったとひろは思い出した。彼はななことそんな会話をしたことがあったのだ。彼の国籍は国外にある。事情があって日本の養父母のもとで育ったらしいがななこも詳しいことは知らなかった。

「とつても、寂しがり屋さんよ」とななこは言いながらひろのテスト勉強の手元を覗き込む。

「だから誰かとつながっていたって気持ちは強いんだと思うわ。でもつながってしまうのも怖くないんじゃないかしら。相手との距離がとれないのね。肉親に愛されたって自覚がないとそういうところにあらわれちゃうのね」

ひろは参考書を繰りつつ、そうかもしれない、と思う。参考書は昼間、楡山のアドバイスどおりに貼った付箋だらけだ。

「すごくつっけんどんかと思えば、すごく親切」

ななこはくすくすと笑った。

「ひやまさんのヤマ、けっこう当たるわよ。私もすごく助かったもの。教えるのもじょうずだし」

「そうなの？」とひろはななこを見る。

数日後から試験がひかえているにも関わらず、ひろの手は止まり、ななこに話の先を催促していた。

「すぐに試験なんでしょ？ 勉強しなさいよ。お話はおあずけ」

「そんなあ！ それじゃあ、ヘビの煮っ転がしじゃない！」

「……？ なまごろしじゃないの？」

「そ、そうだっけ？ い、いいじゃない、どっちだって」

「よくないわよ！ やっぱり勉強した方がいいわよ！ 私、消えてるわね！ じゃ——」

「ちょっと待ってよ！ あ、そうだ、あたし英語でわかんないところあるのよ、教えてよ！」

「そんなのムリよ！」

「いいじゃない、ねえ付き合ってよ、ななこ先輩！」

「なにいつてるのよ、先輩なんかじゃないわよ、私、死んだ時、高一だったのよ、二年の英語がわかるわけじゃない！！」

「え……あたしより年下だったの？」

「わたし十五よ」

「うそ——あたしなんかよりずっと落ち着いてるし、いろんなこと知ってるみたいだし、ずーっと年上かと思ってた」

ななこは困った顔で笑いながら、憮然としているひろをなだめた。

「あなたの試験が終わるころにはもっといろんなこと思い出してと思うの。そしたら何でも話すわ。だから今は勉強してよ、ね？ だいたい、赤点なんか取ったら……」

037.

「それは……まずいわ！ 桧山のヤ、じゃなかった、桧山さんにどんなにバカにされることか！」

「彼はバカにしたりしないと思うわ。でもせっかく教えてもらったんだから、少しはお返ししたら？」

「それもそうだわ。桧山のヤ、じゃなかった、桧山さんを見返してやらなくっちゃ！」

ななこはあきれてため息をつき、ひろの顔を見た。

「あなた、ひやまさんに何か含むところでもあるの？」

「え？ べつに。なんにもないわよ」ひろはすまして胸をそらした。

「なら、いいんだけど」

「……」

「ひやまさんには、しあわせになってほしいから」

「あの一、それとあたしとどういう関係があるの？」

ななこはふとひろを見返した。じっと黒目勝ちの目で見られてひろはなんとなく居心地がわるい。

「な、なによ？ どうかしたの？」

「そういえば、あなたは……あなたは誰なのかしら？」

「は？ あたしは間宮ひろ」

ななこはいくらか眉をひそめた。黒目勝ちの目に影が落ち、ひどく神秘的な表情になる。

「私はあなたには一度も会わなかった……ということは、あなたはひやまさんの関係者……」
「??? だから、あたしと桧山のヤ、じゃなかった、桧山さんは無関係なんだってば！」

ななこはあわてるひろをみつめたまま心ここにあらずな風情で消えてしまった。

「ちょっとー！！ なんなのよ、まったく！！ 気になるようなことばかり言って、勉強しろたって、そんなのムリに決まってんじゃん！ あ～！ こんな時間！？ ホントに赤点ゲットで桧山のヤツにバカにされたらどうしよう！！」

038.

(すっごく悔しいけど、ひととおり桧山のいうとおりにやっておくか)

切羽詰ったあげく、ひろはそうすることにした。悔しいも何もないものだが、時間がない以上、どんな妥協でもしてしまおうという考えだった。

(たとえ、もしも、万が一、あかてん、だったとするじゃない？ でも桧山のいうとおりにやって、この結果なんだっていえば、言い訳になるじゃない？ ヤマをはずしたひとがわるいんだってことよ！ うわー、あたしってあったまい！)

結果が悪くても人のせいにはできるという姑息な考えにすっかり安心したひろは、がぜん集中力を発揮した。ななこが様子を見にあらわれてこっそり背後に立っても気がつかないありさまだった。

*

ひろの期末テストの結果はよかった。それもかなりよかった。桧山のヤマがもののみごとに全部あたってたのだ。

試験日程中に(これはもしかしていけるかも)と手ごたえを感じたひろはテスト勉強にのめりこんでしまって、管理人事務所にもほとんど顔をみせず、新城夫妻を心配させたほどだった。

答案が全部返された日、久しぶりに思い切りトラックを走って、ひろはさすががしくもほくほくと帰ってきた。マンションの近くでめずらしく桧山を見つけ、自転車をとばして追いついた。

「桧山さま！」

後ろから大声でよばれた桧山はぎよつとして振り向いた。

「ひやま、さま？」

自転車の女子高生はにこにこはちきれんばかりの笑顔だ。

「なんだ、おまえか」

いっしゅん、誰かと思った。夕暮れ時の逆光がひろの輪郭を淡く縁取り、別人のようにみせていた。まぶしい、と思い、目を細めながら「お帰り」と言った。

ひろの表情がいつとき固まり、また元に戻る。

「ただいま！」

「こんな時間まで部活か？」

「うん。部活。それよりねえ、よかったよ、テスト！」

「テスト？ ああ、期末だって行ってたっけ。へえ、オレのヤマがあたったんだろ？」

「そーなの！ もうばっちり！ 桧山さま、さすが！ すごい！ 伊達に年とってないね！」

「おまえ、ひとこと多いぞー」

「あ、ごめん。でもねえ、みんな、今度のは難しかったっていったの、あたしは桧山さんのいったとこ集中してやったおかげだわ、こんなに嬉しいの、高校に合格した時以来かなあ！」

「それはよかったな」

ひろは器用にバランスをとりながらペダルを踏み、桧山のとなりに並んでゆっくり走る。

「うん、よかった！ ありがとう」

桧山はなにも言わなかったがとなりのひろに視線を送った。ひろはそれを受けてどぎまぎしてしまう。

(このひと、目で笑えるんだ……)

切れ長で形がきっぱりしているだけに、笑みをたたえたときの表情は身震いを覚えるほど甘く、魅力的だった。涼しい風が針葉樹の香りをのせて通り過ぎた。幸せだ、とひろは思った。

「え、え……と、それで、ね、私、桧山さんになにかお礼しなくちゃ、って思うんだけど……」

039.

「お礼……いいよ、そんなの」桧山はちょっと目を見開いて言った。

「でもー」とひろは甘えるように返す。

「いって、ほんとに。気持ちだけもらっとく。ヤマなんてあてずっぽみみたいなもんだし、運がよかったっただけだろ？ それより、そんなの当てにしなくてすむようにちゃんと勉強しろよ、な？」

「う～ん……」そりゃそうだろうけど、それじゃなんかつまんない、とひろは思った。「桧山さんて、いがいとかたい？」

「意外ってなんだ、意外って。オレは最初っからかたいよ、経済学部がかたくなってどうするんだよ」

「……桧山さん、学校卒業したらどうするの？」

桧山の答えはいたってシンプルだった。「くにへ帰って親の跡を継ぐ」

「……」

「……学校辞めて、そうしようと思ってる」

「……え？」

ひろは思わずブレーキレバーを握った。タイヤがぎつときしみ、車道側によろめく自転車のハンドルを桧山はとっさにつかんだ。その横を宅配のマークをつけた車が通り過ぎ、ひろの制服のスカートがふわっと浮いた。

「気をつけろよ」

ありがとう、とつぶやきながら、ひろは桧山を見上げた。

「ど、どうしたんですか、急にそんな、冗談でしょ？」

気色ばむひろをみて桧山はちょっと苦笑してみせた。

「半分、本気さ。でもおまえには関係ないことだろ？」

関係なくない、とひろはもう少しで言いそうになった。桧山がいなくなったら、ななこはどうなるの？

そうともいえず、置いていかないで、と、懸命に目で気持ちを訴えようとする。そんな目で見られて、桧山は鼻白んだ。

「ああ、半分は冗談！ だからそんな顔するな！」

「ええ、でも！」

「……前から感じてたんだ、オレはここにいられない、ってさ」

「どういうこと？」

「感傷的なセリフに聞こえるかもしれないが、そういうこと。オレがここにいることで、オレもオレに関わりのある人たちも、みんな立ち止まってしまってる、そう感じるんだ」

「よく、わかんない」

「週末に、親父とおふくろのところへ行ってきた」

「ああ……」そうするよう、ひろ自身が勧めた。

「兄夫婦は、思ったより元気だった。オレは大事なくてよかった、と思ったんだが……帰りがけに兄がこっそり言ったんだ。流産じゃないんだって」

「———」

「義姉は妊娠七ヶ月だった。法的にそれ、死産の扱いになるんだそうだ。亡くなった子はふつうに人として扱われるんだな。だから役場にも届けたし、内々に葬式も済ませた、って」

「———」

「それに……」

「……？」

「義姉はもう子供が産めないんだそうだ」

ひろは絶句した。

「そんなのオレには関係ない、とおまえはいうかもしれない。いや、普通、誰だってそういうだろう。だが、そうとも思えないことがあって——」

「———」

「——夢を見た。小さい子供。五才くらいかな。そいつがオレを、じいっと見て、言うんだ。『約束しただろ？』って」

「———」

「そいつはうさぎみたいに髪も皮膚も白くて、目が赤かった。アルビノというやつだが、まるで亡霊のようだった」

「桧山さん！」と言ってみたものの、あとが続かない。彼がよびよせてしまったななこだって亡霊のようなものなのだ。

桧山は苦笑していた。

「心当たりはある、ような気がする。いや、亡霊のような子供に心当たりはないが、約束をしたような気がするんだ。なにかとても……大事なことで、オレはそれを果たさなくちゃならない……」

「そ、それとおねえさんの事情と、なんの関係があるっていうのよ！！」

ひろは思わず大声で叫んでしまった。このひとはいったい、なにをいってるんだらう??

「ないよな」

桧山はそれだけ言って、黙ってしまった。ひろには彼の言葉のほとんどが理解できなかったが、反論したりたずねたりする気にはなれなかった。

ひろのマンションの部屋には夜な夜な美少女のゆうれいが現れ、ひろと話をする。いつも話題の中心は彼、桧山 健だ。

それというのも彼は自分が呼び寄せたゆうれいを認識できないからで、だからひろが生来の微々たる霊視能力を使ってゆうれいのななことコンタクトをとるはめになってしまったのだ。

考えてみれば迷惑な話だが、元々、人好きがして世話好きなひろのこと、多少の迷惑は脇において、私がなんとかしてあげなくちゃ、と思い込みはじめていた。ななこの身の振り方も桧山の悩みも他人事じゃないという気がした。

だがそれにしても、とひろもいっしょに黙りこくって、考えた。

目の前にいる桧山は見た目が並以上に整っているだけに、いつもどこか途方にくれている印象が強かった。現実の問題をどうしていいかわからず手をこまねている不器用な人、という印象だ。

危なっかしくてみていられない、私が力にならなくちゃならない、ひろにそんな気持ちをおこさせるものがあつた。

つい先日も彼に帰郷して親兄弟に会ってきたらどうかと提案したのは、ほかならぬひろ自身であり、けっか、彼は夢の中で見ず知らずの幼児に話しかけられた、というのだ。だが夢などという不条理なメッセージをそのまま受け取るなんて、これまたほんとにどうかしている、とひろは思う。

そうだ、ななこも桧山もどうかしている、ひろは幾度もそう思った。

——あなたたちはいったいなんなの！？

——あたしはなんであなたたちに、かかわっちゃったの！？

——これじゃ、危なっかしくて、怪しくて、放っておけないじゃない！！

ひろは、ふいに、自分でも思いがけないことを口走った。

「私、桧山さんにどこへも行ってほしくない！」

桧山は驚いて、ハンドルをきつく握り締めて立ちどまっているひろを振り返った。

「どこへも行かないで、お願い！」

ひろは衝動的に畳み掛ける。とつぜん胸の中に熱いものがふくれあがり、なにか、なにか言葉にしないではいられなかった。

「お願い！ 私を……おいて行かないで！」

桧山は振り返った姿勢のまま、あぜんとひろを見返していた。

「な……に……」

とつぜんたかぶってしまったひろは泣かんばかりだった。

「——落ち着けよ」と桧山はようやく言った。

「だって！！ だって、私は——」

「あのさあ——」

彼はからだの向きをかえて、パンツのポケットに入れていた手を出し、しっかりとひろに向き合った。

「オレは、二股かけられても嬉しくない」

「——ふたまた——？」

「おまえの彼氏は新しいベッドカバーを気にしてくれたのか？」

自分で、あっ、と思った次の瞬間、ひろは桧山に向かって自転車を突き飛ばしていた。目の前に赤っぽい色の霞がかかり、くらっと目眩がした。

ひやまのばか！ と口走った。あんたなんか、だいつ嫌い！ 地獄に落ちればいいわ！！

自転車を受け止めようとする桧山の脇を、ひろは走り抜けた。少しでも早く彼の前から消えたかった。彼を消してしまいたかった。

自分の俊足をこれほどありがたく思ったことはなかった。桧山がひろの自転車を立て直している間に、ひろはマンションのエントランスに飛び込み階段を駆け上がっていた。

2・「あんたなんか、だいつ嫌い！」

3・「能力や情熱以外のところで道が閉ざされた口惜しさ」へ続く

奥付

nanako-fifteen II

2・あんたなんか、だいつ嫌い！

2025年1月20日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「[Designer](#)」

「[NEO HIMEISM](#)」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社